

## ホセア書6章6節 「いけにえよりも誠実」

### 1A 「誠実」 対 「いけにえ」

1B パリサイ派に対峙された主

2B 自分で贖おうとする罪

### 2A 「全焼のいけにえ」 対 「神を知ること」

1B 「全然知らない」と宣言される主

2B 知ることにある命

## 本文

ホセア書6章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはホセア書3章まで来ました。午後には4章から7章までを読みたいと思いますが、今朝は6章6節に注目します。「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。」

私は個人的に、ホセアの預言を読んでいて、その時宜にかなった預言にとっても驚いています。それは、「豊かさの中にある、偶像礼拝」を取り扱っているからです。豊かであるので、人々は万物の源であられる主なる神の名を呼び求める必要性を感じませんでした。自分が本当の意味で、救いが必要だと感じていなかったのです。それで、自分で自分のことを何とかできる哲学を身に付けています。それを、前回の学びで当時は「バアル」がその神であることを学びました。自分のことは自分で支配したいという欲望です。そして、それが神の民であるはずのイスラエルにも及んでいたのです。表向きは神への礼拝をしていましたが、本音はバアルを拝んでいました。主の前でへりくだって、その語られることを聞いて、主に従い、また仕えるということを行なうのではなく、自分のしたいことを神に要求して、神によって自分が動くのではなく、自分によって神さえ動かそうとする試みです。

教会時代には、ラオデキヤにある教会がこの問題を抱えていました。イエス様はご自身を、「黙示3:14 アーメンである方、忠実で、真実な証人、神に造られたものの根源である方」と呼ばれました。しかし、ラオデキヤの町は物質的に裕福であり、他の地域と違って迫害はそれほど酷くなかった。「まあまあ、そこそこの生活を送って、それで余裕があればイエス様を礼拝しよう」という心の思いになっていました。それでイエス様が叱責されたのです。「3:17 あなたは、自分は富んでいる、豊かになった、乏しいものは何もないと言って、実は自分がみじめで、衰れで、貧しくて、盲目で、裸の者であることを知らない。」彼らが失っていたものは、イエス様との交わりでした。主は、熱心に悔い改めなさい、わたしは戸を叩いているから、それを開けば、わたしはあなたと食事を共にすると言われました。今朝は、そのことに関する内容になります。

イスラエルは、ヤロブアム二世の死後、国が急速に弱体化します。そして、アッシリヤが攻め入

ってきます。そして、攻め入れられないために、巨大な額の貢物をしなければならなくなります。そこで一部の者たちが主に立ち返ろうと言い始めました。主を知ることが追求めようとも言いました。これはすばらしい事です。6章 1-3 節に、そのことが書かれています。しかし、主はそれを喜ばれていませんでした。「あなたがたの誠実さは、朝もやのようだ。すぐに消え去ってしまう。」と言われます。そうです、彼らは行為においては主に立ち返ろうとしているようですが、主に対して沢山ささげているようで、的を外していました。それを正して戒めているのが、ここの箇所です。「わたしは誠実を喜ぶが、いけにえは喜ばない。全焼のいけにえより、むしろ神を知ることが喜ぶ。」自分たちが熱心に捧げているようでいて、実は主ご自身の思いや心から離れていました。

### 1A 「誠実」 対 「いけにえ」

#### 1B パリサイ派に対峙された主

ここのホセア書の言葉は、福音書の中でイエス様が二度、言及されている有名なものです。また、律法学者がイエス様の言葉に応答して、取り上げたものです。イエス様が、取税人マタイの家に行かれると、大勢の取税人や罪人が来て、イエス様の弟子たちと共に食事をされました。それを見ていたパリサイ人たちが、そのことを批判しました。そして、イエス様は、「医者が必要とするのは丈夫な者ではなく、病人です。」と言われて、続けてこう言われます。「マタイ 9:13『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』とはどういう意味か、行って学んできなさい。わたしは正しい人を招くためではなく、罪人を招くために来たのです。」

そして、弟子たちが安息日に、麦畑を歩いていた時に、ひもじくなったので穂を摘んで食べ始めたところ、それは安息日違反であるとパリサイ人たちが言いました。それでイエス様が、ダビデがひもじくて、祭司のみが食べる聖なるパンを食べたではないか、ここには、宮よりも大きな者がいる、そして、「マタイ 12:7『わたしはあわれみは好むが、いけにえは好まない。』ということがどういう意味かを知っていたら、あなたがたは、罪のない者たちを罪に定めはしなかったでしょう。」とされています。ここでも、ホセアの預言を取り上げておられるのです。

さらに、イエス様の教えに感動した律法学者が、イエス様が律法で最も大切な二つの戒めを語られると、正しく答えました。「マルコ 12:32-33 先生。そのとおりです。『主は唯一であって、そのほかに、主はない。』と言われたのは、まさにそのとおりです。また『心を尽くし、知恵を尽くし、力を尽くして主を愛し、また隣人をあなた自身のように愛する。』ことは、どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています。」ここの、「どんな全焼のいけにえや供え物よりも、ずっとすぐれています」というのが、ホセア 6章 6節を意識したものです。愛あるいは誠実のほうが、いけにえよりも優れている、ということです。

なぜ、パリサイ派がそのようになってしまったのか、憐れみよりもいけにえを求めてしまったのか？パリサイ派というのは、バビロンから帰還したユダヤ人たちが、偶像を取り除き、一切の異教や異邦人との関係を断ち切る、エズラのような学者のやり方に倣おうとした人々です。敬虔に生き

ようとする人々でありました。モーセの律法に戻ろうとしていました。ところが、そこで主との生きた関係に入るための律法ではなく、捧げることそのものが自己目的化していったのです。世の汚れから離れることによって、主なる神を知ることが目的のはずなのに、世の汚れから離れることそのものが目標となって、それで分離主義へと発展しました。汚れから離れることによって、自分は霊的になれると思っていました。それで、罪人や取税人からは離れる。安息日は、仕事はしないということを厳格に守るということが、主の誠実あるいは憐れみを思うよりも、優先されるようになっていったのです。初めは主を神としていたのに、主ご自身が自己実現のための手段になってしまっていたのです。自分たちは主に仕えていると思っていたところが、主ご自身が世に現れると、主に真っ向から反対するという、悲しいほどの皮肉と矛盾に陥っていたのです。

## 2B 自分で贖おうとする罪

私たち人間には、根本的な問題があります。治癒されなければいけない、最も大きな病を持っています。それは、「自分で自分を贖おう」とする意欲です。アダムが罪を犯した後に、二人が裸であったことに気づいたことを思い出してください。「創世 3:7 そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」とあります。自分で自分の恥を覆う、自分で自分の罪を贖おうと努力します。けれども、それは、自分に内にある高ぶりを取り扱っていないから行なっている結果です。この実を食べたら神のように賢くなれるという誘惑を受けて食べた実であり、自分が神のようになって、自分の思うようにやりたいという高ぶりが、自分の負い目をも自分で贖おうとする衝動に駆り立たせます。しかし、主は蛇を呪われ、それから女が産みの苦しみを受けると宣言され、男は汗水流して畑を耕すことを宣言された後に、「創世 4:21 神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。」と言われました。これが、神の誠実、ヘセドであります。神がキリストにあって、私たちの負い目を償ってくださいました。この誠実こそが、私たちの頑なな心を砕き、高ぶった心をへりくだらせ、心を真っ白に清める力を持っています。

6 節の前 5 節には、預言者による神の言葉で彼らを切り倒すとあります。神の言葉が彼らの心を突き刺すということです。熱心さによって見失われるのは、主ご自身が何を語っておられたかを聞いていないことにあります。日本では自動車は道路の左側を走行します。これは法律です。それでしっかりと、左側で走ることを覚えます。アメリカに引っ越しました。そこでは道路の右側を自動車は走行します。けれども、もし左側で走ることに熱心になって、それこそが守らなければいけないものだと言い張っていたらどうでしょうか？ 目的は、国の交通法規を守ることですね。左側を走ることそのものが目的ではありません。国の権威に従っているのと同じように、主ご自身の権威に従うことが目的であり、まず主の言葉に聴かなければならないのです。

アダムは、エバから実を渡された時に、主に聞きませんでした。サウルも同じ過ちを犯しました。アマレク人もその家畜も聖絶せよと命じられたのに、アガグ王を残し、上等な牛を残していました。サムエルはこう宣言しました。「1サムエル 15:22 主は主の御声に聞き従うことほどに、全焼のいけにえや、その他のいけにえを喜ばれるだろうか。見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を

傾けることは、雄羊の脂肪にまさる。」いけにえではなく、主の前にへりくだり、その御声に聴き従うことです。ペテロも同じでした、「たとい全部の者があなたのゆえにつまずいても、私は決してつまずきません。(マタイ 26:33)」という、献身の思いを言い表しましたが、三度、主を知らないと言いました。その後、主が復活されてから、「あなたはわたしを愛しますか。」と三度、問われました。主の示された憐れみです。そして、ペテロは立ち上がることができ、他の兄弟も憐れみ、立ち上がらせることができたのです。熱心なだけで聴いていない、という問題が私たちにはあります。立ち止まって、聞くことこそが、私たちに与えられた務めだと言えます。

## 2A 「全焼のいけにえ」 対 「神を知ること」

そして、「**全焼のいけにえより、むしろ神を知ることを喜ぶ。**」とあります。

### 1B 「全然知らない」と宣言される主

主に対して、私はこれだけ捧げていますと言っても、実は全く主のほうは、その人を知らないということがあり得ます。「マタイ 7:22-23 その日には、大ぜいの者がわたしに言うでしょう。『主よ、主よ。私たちはあなたの名によって預言をし、あなたの名によって悪霊を追い出し、あなたの名によって奇蹟をたくさん行なったではありませんか。』しかし、その時、わたしは彼らにこう宣告します。『わたしはあなたがたを全然知らない。不法をなす者ども。わたしから離れて行け。』」これだけのことを行なって、主に対して捧げているはずなのですが、主ご自身が知らないと言われるということは、かなりの衝撃です。けれども、こういうことが起こり得るのです。私たちは、目に見えて、多くのことを成し遂げているように見える人々には、主が必ず付いていられると思いがちですが、必ずしも決してそうではないことが分かります。その人たちの行動を見れば、到底、主を知っているようには思えないようなことを平気で行ないます。

パウロがエペソにいた時のことを思代してください。彼の手によって、神が驚くべき奇蹟を行なわれていました。彼が身につけている手ぬぐいや前掛けを外して病人に当てると、病気が去り、悪霊が出て行きました。「使徒 19:13-15 ところが、諸国を巡回しているユダヤ人の魔よけ祈禱師の中のある者たちも、ためしに、悪霊につかれている者に向かって主イエスの御名をととなえ、『パウロの宣べ伝えているイエスによって、おまえたちに命じる。』と言ってみた。…すると悪霊が答えて、『自分はイエスを知っているし、パウロもよく知っている。けれどおまえたちは何者だ。』と言った。」イエスの名によって悪霊を追い出しているのですが、その御名によって救いを受けていなかった者たちが追い出しを行なおうとしていたのです。イエス様が、悪霊を追い出して戻って来た弟子たちに対して、「ルカ 10:20 だがしかし、悪霊どもがあなたがたに服従するからといって、喜んではなりません。ただあなたがたの名が天に書きしるされていることを喜びなさい。」名前が天に書き記されている、つまり主に知られているということです。

### 2B 知ることにある命

誰かを知っているということは、親密な、人格的な交わりのことを指しています。アダムがエバを

知った、という時の「知る」であります。そして聖書は、知ることこそが命なのだと話しています。「ヨハネ 17:3 その永遠のいのちとは、彼らが唯一のまことの神であるあなたと、あなたの遣わされたイエス・キリストとを知ることです。」主を知るといことこそが、命なのだということです。

金持ちの青年でありましたが、彼はイエス様が子供たちを神の国のゆえに受け入れられた姿を見るなどして、感動して次のことを尋ねました。「マルコ 10:17 尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。」イエス様の中に永遠の命を見たのです。けれども、彼は、「私は何をしたらよいでしょうか」と尋ねたことが間違っています。何かを捧げることによって、そこに命はないのです。命はあくまでも、イエス・キリストを知るという中に存在するのです。ですから、自分自身は戒めを守ったという自負は出ても、永遠の命の中に入ることはできませんでした。悲しい顔つきで去っていきました。

命というのは、そのつながっている相手がいてこそ命です。相手との関係がないのに、命は成り立ちません。ですから、相手、対象こそが大事であり、この方を知なのです。ところが、私たちはとにかく、イエス様を知ることではなく、自分の信仰を信じていることが多いです。神を信じているのではなく、自分の信じる力、自分の信じ方、自分の信心深さがどれだけのものかをいつも気にしています。イエス様がからし種のほどの信仰があれば、山に動けを命じることができることを話されたのに、からし種しかないと言って嘆いているのです。

内村鑑三が、離婚をしまいそれで落ち込んでいた時に、アメリカの留学先でその学長から次のように助言を受けました。「君は君の内をのみ見るからいけない。君は君の外を見なければいけない。なぜおのれに省みることをやめて、十字架の上に君の罪をあがないたまいしイエスを仰ぎ見ないのか。君のなすところは、小児が植木に鉢を植えて、その成長を確かめんと欲して、毎日その根を抜いて見ると同然である。何ゆえに、これを神と日光にゆだね奉り、安心して君の成長を待たぬのか。」そうです、信仰とは神を信じ、仰ぐことであります。自分の罪を見つめるのではなく、罪を悔い改め、日々キリストを仰ぎ、キリストを目標にして生きることです。

ですから、私たちは主を知っているかどうかであります。これさえわかれば、自分の信仰に対して信仰を置こうとする試みを避けることができるでしょう。立ち止まって、主の言葉を聞くこと。聞くことだけでなく、聞いて従うこと。つまり聞き入ることです。私たちは怠惰の意味を変えないといけません。古代教会の沙漠の修道指導者が、こう言ったそうです。「忙しさとは霊的な怠惰である」これは驚くべき言葉です。忙しいことが、霊的には怠惰だということ。言い換えると、霊的に休むことこそが、霊的に活発なのだということです。